

# 災害という状況の中で生き抜く力をどのように育成すればよいか

～総合的な学習の時間と避難訓練をリンクさせた防災学習の実践～

日田市立東溪中学校

## I 学校の規模及び地域環境

### 1 学校規模

学級数 3 生徒数 68 教職員数 12

### 2 地域環境

本校校区は玖珠川の溪谷に点在する集落によって構成されており、大雨による災害(崖崩れ、浸水)が心配される地域がある。また、校地は玖珠川、矢瀬川と隣接し、水位が急激に上昇してくる様子を目の当たりにすることもあり、大雨・洪水注意報や警報の発令時には、生徒の登下校時及び在校時の安全確保について悩むことも多い。

## II 取組のポイント

総合的な学習の時間と避難訓練をリンクさせた防災学習に取り組んだ。

- 【1】防災関連施設の見学と防災関係者・被災者の体験談等の聴講
- 【2】災害事象対応基礎知識・技能習得学習及び災害ボランティア体験学習
- 【3】避難所生活支援体験

## III 取組の概要

### 1 取組の趣旨やねらい

中学校では、各教科や特別活動等学校の教育活動全体を通じ、各校の実態に応じた防災教育が工夫・実践されている。本年度、本校においては、「周囲の状況を的確に判断し、主体的に行動する態度」の育成を目的とした防災教育を各学年における総合的な学習の時間と全校体制で行う特別活動の時間をリンクさせながら取り組むことにした。

総合的な学習の時間では、学年ごとに防災にかかわるテーマを設定し、調べ学習や体験学習の取り組みを行うことにより、災害や防災に対する理解と防災に関わる実践力を高めていくことにした。そして、避難訓練(全校体制で行う特別活動)を総合的な学習の時間に学んだことを実践する場として位置付けることによって、総合的な学習の時間に育んだ力を生きる力として定着させていこうと考えた。

### 2 取組の内容・方法等

総合的な学習の時間の年間計画に「災害を知り、命を守る」を単元名とした単元を全学年位置づけ、学年ごとにテーマを設定し、調べ学習、体験学習を中心とした防災学習に取り組んだ。各学年のテーマは、1年生が「災害時に自分の命を守る方法について考えよう」、2年生が「災害時に自分たちができることを考えよう」、3年生が「災害時に地域で自分たちができることを考えよう」で、自助・公助・共助を意識した内容とした。

総合的な学習の時間に学んだことの実践の場として、学校・地域合同の避難訓練(10月19日)を位置づけた。この避難訓練は、大雨洪水警報と避難指示が生徒在校時に出され、地域の避難場所として指定されている学校の体育館に地域の高齢者や外国からの旅行者、目の不自由な方等災害弱者が避難してきた、との想定のもとに実施することにした。

避難訓練当日、生徒たちは体育館への避難指示に基づき、荷物を持って体育館に避難し、点呼を受けた後に、自分たちがこれまで学んできた学習成果を生かすべく、学年に応じた避難所における支援活動に取り組んだ。

10月19日の避難訓練・避難所生活支援体験を意識し、総合的な学習の時間に各学年で取り組んだ防災学習の内容は以下の通りである。

(1) 全校防災学習「台風、大雨、雷、竜巻から身を守る」 5月9日

台風、大雨などの発生メカニズムについて、これまでの既習内容を振り返りながら、その特徴について理解を深めた。また、大雨などが起きた場合は、どのような危険が予想され、どのように身を守ればよいかについて考えた。

(2) 1年調べ学習 「防災マップの作成」

過去に起きた自然災害について、家族等から聞き取り、自宅周辺の危険個所を把握した。それらを学校に持ち寄り、校区の防災マップを作製し、マップ作製経過等の発表を通して、自然災害に対する危機意識・防災意識を生徒・保護者間で共有した。



(3) 2年調べ学習 「災害時の外国人の困りへの支援」

天瀬温泉にはたくさんの外国人観光客が訪れている。災害時に避難所に避難してきた外国人の困りに対し、どのような支援ができるかを考え、対応するための実践力を習得することをねらいとした調べ学習に取り組んだ。特に、外国人の困りに対応していくためのコミュニケーション力を身につけるために、困り対応のシミュレーションを繰り返し行った。



(4) 3年調べ学習「自分たちができる避難所での支援活動」

災害時の避難所には、さまざまな「困り」を持った方が生活を共にする。災害時には、どのような人にどのような困りが生じるのかを調べたり、体験したりすることによって、避難所でのボランティア活動に主体的に取り組むための実践力を身につけることをねらいとした体験学習等に取り組んだ。



(5) 3年健康生活支援講習「災害時の高齢者支援」 7月5日

- ア 避難所で過ごす人たちの困りについて
- イ 避難所で過ごす高齢者をサポートする際に役立つ技術の体験（ホットタオル、毛布で作るガウン等）



(6) 1、2年校外学習「豪雨災害被災校昭和学園高等学校訪問」

7月11日

- ア 平成24年九州北部豪雨災害 被害の状況について
- イ 復興に向けたボランティア活動の必要性について
- ウ グループワーク「みんなでわけよう」



(7) 全校生徒・保護者救急法講習「心肺蘇生とAEDの使用体験」

7月12日

- ア AEDの使用体験・習得
- イ 心臓マッサージと人工呼吸体験・習得



(8) 3年健康生活支援講習「災害時の視覚障がい者支援」

7月13日

- ア 災害時の視覚障がい者の困りや不安な気持ちについて
- イ 避難所で必要な支援について



(9) 2年救急法講習「毛布を使った搬送、三角巾の作り方・使い方」

7月15日

- ア 日本赤十字社の活動について
- イ 毛布や三角巾を使っでの救護体験



(10) 3年校外学習「耶馬溪ダム、弘法寺、山国川河川事務所訪問」

9月23日

- ア 防災関連施設ダムの機能について
- イ 災害時にボランティアをする際の留意点について
- ウ 災害時の非常食調理体験



(11) 3年校外学習「高齢者施設〈喜楽苑〉訪問」

9月28日

- ア 車椅子体験、高齢者疑似体験
- イ 高齢者とのコミュニケーション体験



(12) 1年非常食炊き出し体験「災害時の食事について」

10月14日

- ア お湯をかまどで沸かす体験
- イ アルファ化米調理体験

(13) 学校、地域合同避難訓練「避難所生活支援体験」 10月19日

ゲリラ豪雨により、校地を南東に挟む玖珠川と矢瀬川の水位が急激に上昇し、避難体制構築が必要になった場合(大雨洪水警報発令)を想定した避難訓練(下校準備をし、体育館に集合)を実施した。また、市の避難勧告に基づき、避難所である学校の体育館に近隣住民や外国人旅行者等が避難してきたことを想定した避難所支援の体験活動を行った。生徒は、総合的な学習の時間に学んだことや体験したことを生かそうとそれぞれの役割分担に基づいて、体育館に避難してきた地域の高齢者や地域で働く外国人の方々(協力者)に対する支援活動に取り組んだ。

ア 1年生の活動

非常食の炊き出し

イ 2年生の活動

英語・韓国語・中国語を日常言語としている人への支援活動

・受付 案内 連絡 臨時保健室開設準備手伝い

ウ 3年生の活動

災害弱者(全盲の方、車椅子利用者、高齢者)への支援活動

・避難所への誘導 非常食配膳 食事サポート 困っていることへの対応



今回の活動のポイントは、学年ごとに分担されている活動を機能させるための連携体制をどう構築するかであった。生徒の活動の連携図を作成したり、生徒間の連携会議を開催したりし、スムーズな支援ができるように工夫したつもりであったが、活動後の生徒の感想文には、「横の連絡がうまくとれず、何をすればよいかわからない場面が多くあった。」等の感想が多くみられた。各学年の取組状況をお互いに把握するための情報交換、情報の共有の工夫が生徒・教職員ともに今後の課題として認識できた。

また、「準備しておいたことが、実際には通用しなかった。避難してきた人と話すことにより、何が本当に必要なのかわかった。」との感想もみられるなど、実際にやってみることの大切さを再実感することができた避難所支援活動体験であった。

(14) 1、2年防災学習「的確な防災情報の収集」 1月13日

- ア 各地における豪雨被害の状況について～大雨時の川の氾濫の危険性(東溪中の場合)～
- イ 川の氾濫を知り、的確な避難行動に役立つ「国土交通省 川の防災情報」について



### 3 実践の成果

生徒は、水害のメカニズムを学んだり、水害被害の実態を聞いたりすることにより、これまで体験のない水害の恐ろしさを身近なものとして感じつつある。また、水害をはじめとしたさまざまな災害から自他の命を守るために、どのような行動をとればよいかについて主体的に考えるようになり、避難訓練の際には教職員の指示に従いつつも、自分のとるべき行動についてそれが最善の方策なのかを自問自答しながら(考えながら)行動する生徒が増えてきた。

災害弱者への支援等、災害時にできるボランティア活動の必要性についての生徒の理解は進み、避難訓練(避難所支援体験)においては、体育館に避難してきた災害弱者への支援体験活動に懸命に取り組んでいた。避難所支援体験は、実際の災害場面とはちがい、大変甘い想定の中で実施されたものではあるが、生徒たちにとっては、体験学習で学んだことを実際の場で活用していくための勇気と自信を得た貴重な機会となった。また、教職員にとっては、学校が避難場所となった場合に、避難所の責任者となる天瀬振興局の職員とどう連携すればよいか、また、避難者のニーズを知り少しでも快適な避難所としていくために、避難者とどうコミュニケーションを図ればよいか等について考えたり、体験したりするよい機会となった。

### 4 課題等

本校は一級河川玖珠川に隣接し、水害に対し十分な備えをしておくことが必要な学校である。しかし、これまでの取組を振り返ると、水害の怖さを認識させるための手だてが不十分であったことが反省点としてよみがえってくる。生徒・教職員ともに「水害の怖さを十分認識することによって、学習や備えの大切さ、そして学習や備えをすることでその怖さを軽減できる」ことをより実感として持つことができる。この基本的なことが不十分なまま避難者対応等の学習に取り組んでも表面的な学習・活動で終始してしまう。このことを実感したのは、10月19日に実施した地域との合同避難訓練のときであった。

生徒たちは、避難所支援体験活動を通して、これまで準備してきた「支援」が災害弱者のニーズに合わないものや不適切なものがあることを、実際に体験することによって学びとることができている。このことは、災害に対する深い学習の必要性認識や、次の学習への意欲喚起へとつながっていった。しかし、その経験やその後学び直したことを活かすための機会(2回目の合同避難訓練等)を時間の制約や地域との連携体制の不十分さもあり、創出することができなかった。このことを学校としての一番の課題として認識している。

災害を身近な問題として捉えさせたり、被災者支援をニーズに合ったものにしていくには、学校と地域の連携強化が不可欠であると考えている。